

# 畫の悲み

国木田独歩

青空文庫



畫ゑを好すかぬ小こ供どもは先まづ少すくないとして其その中うちにも自じ分ぶんは小こ供どもの時とき、  
 何なによりも畫ゑが好すきであつた。(と岡おか本ほん某が語かたりだした)。  
 好すきこそ物ものの上じやう手ずとやらで、自じ分ぶんも他たの學がく課くわの中うち畫ゑでは同どう  
 級うき生ふせいの中うち自じ分ぶんに及およぶものがない。畫ゑと數すう學がくとなら、憚はげりなが  
 ら誰たれでも來こいなんて、自じ分ぶんも大おほいに得とく意いがつて居ゐたのである。しか  
 し得とく意いといふことは多少たせう競きやう争さうを意い味みする。自じ分ぶんの畫ゑの好すきな  
 ことは全まつた天てん性せいといつても可よからう、自じ分ぶんを獨ひとりで置おけば畫ゑばか  
 り書かいて居ゐたものだ。  
 獨ひとりで畫ゑを書かいて居ゐるといへば至し極ごく温おと順なしく聞きえるが、其その癖くせ自じ  
 分ぶんほど腕わん白ぱく者ものは同どう級きふ生せいの中うちにないばかりか、校かう長ちやうが持もて

あま餘して數々退校を以て嚇したのでも全校第一といふことが分る。

全校第一腕白でも數學でも。しかるに天性好きで

は全校第一の名譽を志村といふ少年に奪はれて居た。この少

年は數學は勿論、其他の學力も全校生徒中、第二

流以下であるが、畫の天才に至つては全く並ぶものがないので、

僅に壘を摩さうかとも言はれる者は自分一人、其他は悉く志村の

天才を崇め奉つて居るばかりであつた。ところが自分は志村を

崇拜しない、今に見ろといふ意氣込で頻りと勵げんで居た。

元來志村は自分よりか歳も兄、級も一年以上であつたが、自

分は學力優等といふので自分の居る級と志村の居る級とを

どうじ  
同時にやるべく校長から特別の處置をせられるので自然志  
村は自分の競争者となつて居た。

しか  
然るに全校の人氣、校長教員を始め何百の生徒の  
人氣は、温順しい志村に傾いて居る、志村は色の白い柔和な、女

にして見たいやうな少年、自分は美少年ではあつたが、亂

暴な傲慢な、喧嘩好きの少年、おまけに何時も級の一

を占めて居て、試験の時は必らず最優等の成績を得る處から

教員は自分の高慢が癩に觸り、生徒は自分の壓制が癩に觸

り、自分にはどうしても人氣が薄い。そこで衆人の心持は、

せめて晝でなりと志村を第一として、岡本の鼻柱を挫いて

やれといふ積であつた。自分はよく此消息を解して居た。そし

て心しんちゆう 中ちゆうひそかに不平ふへいでならぬのは志村しむらの畫ゑ必ずしも能よく出來できて居ゐない時ときでも校かうちやう長ちやうをはじめ衆人みんがこれを激げき賞しやうし、自分じぶんの畫ゑは確たしかに上じやう出來できであつても、さまで賞ほめて呉くれ手てのないことである。少年こどもながらも自分じぶんは人氣にんきといふものを惡にくんで居ゐた。

或ある日ひ學がく校かうで生徒せいとの製作物せいさくぶつの展覽會てんらんくわいが開ひらかれた。其その出しゅつ品びんは重おもに習字しふじ、※畫づぐわ、女子ぢよしは仕立物等したてものとうで、生徒せいとの父兄姉妹ふけいしまいは朝あさからぞろくと押おしかける。取とりどりの評ひやう判ばん。製作物せいさくぶつを出だした生徒せいとは氣きが氣きでない、皆みなそはくして展覽室てんらんしつを出でたり入はいつたりして居ゐる自分じぶんも此この展覧會てんらんくわいに出しゅつ品びんする積つもりで畫紙ゑがみ一枚まいに大おほき馬うまの頭あたまを書かいた。馬うまの顔かほを斜はすに見みた處ところで、無論むろん少年せうねんの手てには餘あまる畫題ぐわだいであるのを、自分じぶんは此この一舉きよに由よつて是非志村ぜひしむらに

打ち勝とうといふ意氣込だから一 生懸命、學校から宅に歸ると一室に籠つて書く、手本を本にして生意氣にも實物の寫生を試み、幸ひ自分の宅から一丁ばかり離れた桑園の中に借馬屋があるので、幾度となく其處の厩に通つた。輪廓といひ、陰影と云ひ、運筆といひ、自分は確にこれまで自分の書いたものは勿論、志村が書いたものゝ中でこれに比ぶべき出來はないと自信して、これならば必ず志村に勝つ、いかに不平な教員や生徒でも、今度こそ自分の實力に壓倒さるゝだらうと、大勝利を豫期して出品した。

出品の製作は皆な自宅で書くのだから、何人も誰が何を書くのか知らない、又互に祕密にして居た殊に志村と自分は互

の畫題を最も祕密にして知らさないやうにして居た。であるから自分は馬を書きながらも志村は何を書いて居るかといふ問を常に懷いて居たのである。

さて展覽會の當日、恐らく全校數百の生徒中尤も胸を轟かして、展覽室に入つた者は自分であらう。※畫

室は既に生徒及び生徒の父兄姉妹で充満になつて居る。そして二枚の大畫（今日の所謂大作）が並べて掲げてある前はもつとけんぶつにん（今日の大畫）が並べて掲げてある前は最も見物人が集つて居る二枚の大畫は言はずとも志村の作と自分の作。

一見自分は先づ荒膽を抜かれてしまつた。志村の畫題はコロンブスの肖像ならんとは！ 而もチヨークで書いてある。元

わんらい 來 學校では鉛筆畫ばかりで、チヨーク畫は教へない。自  
 ぶん 分もチヨークで畫くなど思ひもつかんことであるから、畫の善  
 しと 悪は兔も角、先づ此一事で自分は驚いてしまった。その上なら  
 うま ず、馬の頭と髭髯面を被ふ堂々たるコロンプスの肖像とは、  
 けん 一見まるで比べ者にならないのである。且つ鉛筆の色はどんなに  
 たく 巧みに書いても到底チヨークの色には及ばない。畫題といひ  
 しきさい 色彩といひ、自分の是要するに少年が書いた畫、志村の本  
 んもの 物である。技術の巧拙は問ふ處でない、掲げて以て衆  
 ん 人の展覽に供すべき製作としては、いかに我慢強い自分  
 じぶん も自分の方が佳いとは言へなかつた。さなきだに志村崇拜の連  
 んちゆう 中は、これを見て歡呼して居る。『馬も佳いがコロンプス

は如何だ！』などいふ聲が彼處でも此處でもする。

自分は學校の門を走り出た。そして家には歸らず、直ぐ田甫へ出た。止めやうと思ふても涙が止まらない。口惜いやら情けないやら、前後夢中で川の岸まで走つて、川原の草の中に打倒れてしまつた。

足をばたく／＼やつて大聲を上げて泣いて、それで飽き足らず起上つて其處らの石を拾ひ、四方八方に投げ付けて居た。

かう暴れて居るうちにも自分は、彼奴何時の間にチヨーク畫を習つたらう、何人が彼奴に教へたらうと其ればかり思ひ續けた。

泣いたのと暴れたので幾干か胸がすくと共に、次第に疲れて來たので、いつか其處に臥てしまひ、自分は蒼々たる大空を見

上げて居ると、川瀬の音が涼々として聞える。若草を薙いで  
 来る風が、得ならぬ春の香を送つて面を掠める。佳い心持に  
 なつて、自分は暫時くちつとして居たが、突然、さうだ自分も  
 チョークで書いて見やう、さうだといふ一念に打たれたので、其  
 儘飛び起き急いで宅に歸へり、父の許を得て、直ぐチョークを  
 買ひ整へ畫板を提げ直ぐ又外に飛び出した。

この時まで自分はチョークを持つたことが無い。どういふ風に  
 書くものやら全然不案内であつたがチョークで書いた畫を見た  
 ことは度々あり、たゞこれまで自分で書かないのは到底未だ  
 自分どもの力に及ばぬものとあきらめて居たからなので、志村が  
 あの位る書けるなら自分も幾干か出来るだらうと思つたのである。

再び先の川邊へ出た。そして先づ自分の思ひついた畫題は  
 水車、この水車は其以前鉛筆で書いたことがあるの  
 で、チヨークの手始めに今一度これを寫生してやらうと、堤を  
 辿つて上流の方へと、足を向けた。  
 水車は川向にあつて其古めかしい處、木立の繁みに半  
 ば被はれて居る案排、蔦葛が這ひ纏ふて居る具合、少年  
 心にも面白い畫題と心得て居たのである。これを對岸  
 から寫すので、自分は堤を下りて川原の草原に出ると、今まで  
 川柳の蔭で見えなかつたが、一人の少年が草の中に坐つて頻  
 りに水車を寫生して居るのを見つけた。自分と少年とは  
 四五十間隔たつて居たが自分は一見して志村であることを知つた。

かれは一心になつて居るので自分の近いのに氣もつかぬらしかつた。

おやく、彼奴が來て居る、どうして彼奴は自分の先へ先へと廻はるだらう、忌ましくしい奴だと大に癩に觸つたが、さりとして引返へすのは猶ほ慊だし、如何して呉れやうと、其儘突立つて志村の方を見て居た。

彼は熱心に書いて居る草の上に腰から上が出て、其立てた膝に畫板が寄掛けてある、そして川柳の影が後から彼の全身を被ひ、たゞ其白い顔の邊から肩先へかけて楊を洩れた薄い光が穩かに落ちて居る。これは面白ろい、彼奴を寫してやらうと、自分は其儘其處に腰を下して、志村其人の寫生に取りかゝ

つた。それでも感かん心しんなことには、畫板ぐわばんに向むうと最早もはや志村しむらもい  
ままくくしい奴やつなど思おもふ心こころは消きえて書かく方ほうに全まつたこころと  
つた。

彼かれは頭かしらをあげては水みづ車ぐるまを見み、又また畫板えぼんに向むか  
左さも愉ゆ快くわいらしい微笑びせうを頬ほに浮うか  
分ぶんも我われ知らしず微笑びせうせざるを得えなかつた。

さうする中うちに、志村しむらは突とつ然ぜん起たち上あがつて、其その拍ひやう子しに自じ分ぶん  
方ほうを向むいた、そして何なんにも言いひ難がたき柔にう和わな顔かほをして、につこりと  
笑わらつた。自じ分ぶんも思おもはず笑わらつた。

『君きみは何なにを書かいて居ゐるのだ、』と聞きくから、  
『君きみを寫しや生せいして居ゐたのだ。』

『僕は最早水車を書いてしまつたよ。』

『さうか、僕は未だ出来ないのだ。』

『さうか、』と言つて志村は其儘再び腰を下ろし、もとの姿勢になつて、

『書き給へ、僕は其間にこれを直すから。』

自分は書き初めたが、書いて居るうち、彼を忌ま／＼しいと思つた心は全く消えてしまひ、却て彼が可愛くなつて來た。其うちに書き終つたので、

『出來た、出來た！』と叫ぶと、志村は自分の傍に來り、

『をや君はチヨークで書いたね。』

『初めてだから全然畫にならん、君はチヨーク畫を誰に習つた。』

『そら先達東京から歸つて來た奥野さんに習つた然し未だ習ひたてだから何にも書けない。』

『コロンブスは佳く出來て居たね、僕は驚いちやツた。』

それから二人は連立つて學校へ行つた。此以後自分と志村はまつたなかよく、自分は心から志村の天才に服し、志村もまた元來が温順しい少年であるから、自分を又無き朋友として親しんで呉れた。二人で畫板を携へ野山を寫生して歩いたことも幾度か知れない。

間もなく自分も志村も中學校に入るこゝとなり、故郷の村落を離れて、縣の中央なる某町に寄留することゝなつた。中學に入つても二人は畫を書くことを何よりの樂にして、

以前いぜんと同じく相あひとも伴なふて寫しやせい生でに出掛でかけて居ゐた。

此この某ぼうまち町ちから我わが村そんらく落らくまで七しち里り、若もし車しやだう道だうをゆけば十三じゅうさん里りの  
 大おほまは迂り廻りになるので我われ々々は中ちゆうがくかう學がく校かうの寄きしゆくしや宿しゆく舎しやから村そんらく落らくに  
 歸かへる時とき、決けつして車くるまに乗のらず、夏なつと冬ふゆの定てい期き休きゆう業ぎやう毎ごとに必かならず、此この七  
 里りの途みちを草わらぢ鞋ぢがけで歩あるいたものである。

七しち里りの途みちはたゞ山やまばかり、坂さかあり、谷たにあり、溪けいりう流りうあり、淵ふちあ  
 り、瀧たきあり、村そんらく落らくあり、兒じどう童どうあり、林はやしあり、森もりあり、寄きしゆくしや宿しゆく舎しや  
 の門もんを朝あさはや早でく出ひて日ひの暮くれに家うちに着つくまでの間あひだ、自じぶん分ぶんは此これら等かたちの形かたち、  
 色いろ、光ひかり、趣おもむきを如どう何いふ風ふうに畫かいたら、自じぶん分ぶんの心こころを夢ゆめのやうに鎖と  
 ぎして居ゐる謎なぞを解とくこと出でき來きるか、それのみに心こころを奪とられて  
 歩あるいた。志しむら村らも同おなじ心こころ、後あとになり先さきになり、二ふたり人りで歩あるいて居ゐると、

時々路傍に腰を下ろして鉛筆の寫生を試み、彼が起たずば我も起たず、我筆をやめずんば彼も止めないと云ふ風で、思はず時が経ち、驚ろいて二人とも、次の一里を駈足で飛んだこともあつた。

爾來數年、志村は故ありて中學校を退いて村落に歸り、自分は國を去つて東京に遊學することゝなり、いつしか二人の間には音信もなくなつて、忽ち又四五年経つてしまつた。東京に出でから、自分は畫を思ひつゝも畫を自ら書かなくなり、たゞ都會の大家の名作を見て、僅に自分の畫心を満足して居たのである。

處が自分の二十の時であつた、久しぶり故郷の村落に歸

つた。宅の物置に曾て自分が持あるいた畫板が有つたのを見つけ、  
 同時に志村のことを思ひだしたので、早速人に聞いて見ると、  
 驚くまいことか、彼は十七の歳病死したとのことである。  
 自分は久しぶりで畫板と鉛筆を提げて家を出た。故郷の風  
 景は舊の通りである、然し自分は最早以前の少年ではない、  
 自分はたゞ幾歳かの年を増したばかりでなく、幸か不幸か、人  
 生の問題になやまさされ、生死の問題に深入りし、等しく自  
 然に對しても以前の心には全く趣を變へて居たのである。言ひ難  
 き暗愁は暫時も自分を安めない。  
 時は夏の最中自分はたゞ畫板を提げたといふばかり、何を書い  
 て見る氣にもならん、獨りぶら〜と野末に出た。曾て志村と共

に能く寫生に出た野末に。

闇にも歡びあり、光にも悲あり 麥藁帽の廂を傾けて、彼方の

丘、此方の林を望めば、まじくと照る日に輝いて眩ゆきばかり

の景色。自分は思はず泣いた。

# 青空文庫情報

底本：「定本 国木田独歩全集 第二卷」学習研究社

1964（昭和39）年7月1日初版発行

1978（昭和53）年3月1日増訂版発行

1995（平成7）年7月3日増補版発行

底本の親本：「運命」佐久良書房

1906（明治39）年3月発行

初出：「青年界」第一卷第二號

1902（明治35）年8月1日発行

入力：鈴木厚司

校正：小林繁雄

2001年12月21日公開

2004年7月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 畫の悲み

国木田独歩

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>